

参考文献

- クリフォード、ジェイムズ、2002、「ディアスポラ」『ルーツ—20世紀後期の旅と翻訳』、有元健ほか（訳）、月曜社、277-314頁。
- ブルーベーカー、ロジャーズ、2009、「『ディアスポラ』のディアスポラ」、赤尾光春（訳）、白杵陽（監修）『ディアスポラから世界を読む』、明石書店、375-400頁。
- ヨー・ブレンダ、2007、「女性化された移動と接続する場所—『家族』『国家』『市民社会』と交渉するトランスナショナルな移住女性」、伊豫谷登士翁（編）『移動から場所を問う—現代移民研究の課題』、有信堂、149-170頁。

石上悦朗・佐藤隆広 [編] 『現代インド・南アジア経済論（シリーズ・現代の世界経済6）』（京都：ミネルヴァ書房、2011年、414頁、3,500円＋税、ISBN978-4-623-05871-6）

（評）友澤 和夫*

現代インド・南アジア経済に関する待望のテキストが刊行された。本書はミネルヴァ書房『シリーズ・現代の世界経済』全9巻の第6巻に当たる。このシリーズは、グローバル化の進展によって変動する世界経済の体系的把握を目的に編まれたもので、2004年に同社より出版された現代世界経済叢書全8巻シリーズの後継と位置づけられる。ただし、同叢書においては第4巻『アジア経済論』があるものの、そこで言うアジアとは東アジアと東南アジアであり、残念なことにインド・南アジアは対象から外されていたのである。今回のシリーズでは、インド・南アジアが単独の巻とされた一方で、東アジア・東南アジアを扱った巻はない。この措置は、両シリーズ間で取り上げる地域のバランスをとったものとも言えるが、評者は現在の世界経済におけるインド・南アジア地域の重要性の高まりを反映したものと理解している。

もっとも、こうした世界シリーズ本によらずとも、インド経済については各時代の経済情勢やその変動を反映しながら、これまでに多くの優れた概説書が刊行されてきた。たとえば評者が大学院生であった1980年代後半には、その時期に導入された部分的自由化の影響を大きな論点として、『インドの工業化 岐路に立つハイコスト経済』（伊藤正二編、アジア経済研究所、1988）や『新版インド経済』（西口章雄・浜口恒夫、世界思想社、1990）が出版された。そうした本を、赤線を引いたり、メモを取ったりしながら繰り返し読んだことを今でも思い出す。本書も、インド・南アジア経済を志す若い世代にとっては、こうした必読の書となることが十分に予想される。

* 広島大学大学院文学研究科

1999、『工業空間の形成と構造』、大明堂。

2012、「インド自動車部品工業の成長と立地ダイナミズム」、『広島大学現代インド研究—空間と社会』、第2巻、17-33頁。

本書の構成は、以下の通りである（カッコ内は執筆者および訳者）。各章は、インド人とネパール人研究者を含め、当該テーマに通暁した専門家が執筆している。また、いわゆるベテランだけでなく、新しいテーマの執筆には若手を積極的に登用している点も特記されよう。

序章 現代インド・南アジア経済をみる眼（石上悦朗、佐藤隆広）

第1章 経済成長と貧困問題（黒崎卓、山崎幸治）

第2章 財政政策と財政制度（福味敦）

第3章 金融システムと金融政策（二階堂有子）

第4章 国際貿易と資本移動（佐藤隆広）

第5章 農業（杉本大三）

第6章 産業政策と産業発展（石上悦朗）

第7章 情報通信産業（スニル・マニ、上池あつ子訳）

第8章 自動車産業とサポーター産業（馬場敏幸）

第9章 繊維産業と製菓産業（藤森梓、上池あつ子）

第10章 財閥と企業（三上敦史）

第11章 パキスタン経済（小田尚也）

第12章 スリランカ経済（絵所秀紀）

第13章 バングラデシュ経済（藤田幸一）

第14章 ネパール経済（サガル・ラージ・シャルマ、中西宏晃訳）

終章 現在インド・南アジア経済の課題と展望（佐藤隆広、石上悦朗）

構成面からみると、序章を除く残りの章は、大きく3つにグループ化されている。第1章から第4章は、「第I部 マクロ経済からみたインド経済」としてまとめられている。第5章から第10章は「第II部 産業と企業経営からみたインド経済」であり、第11章から終章は「第III部 南アジア各国経済論」である。本書の約7割がインド経済の説明に充当されているが、南アジアにおけるインド経済の大きさからすれば至当であろう。また、インド経済については、マクロ経済的視点と産業・企業の視点の2つの軸によって捉えようとしており、経済学のテキストとしてオーソドックスな編成を採用していると言える。以下、各章の内容について簡潔に触れておきたい。

序章では、経済成長、人口と出生率、人間開発の諸指標、産業構造の変化、対外開放度、統治体制の6つの観点から、現代インド・南アジアの基礎的知識がまとめられている。本章を読み進める上で前提となる内容である。第1章は、貧困問題をメインテーマとしている。ここで言う貧困概念は、単に所得や消費の水準によるのではなく、教育や健康などの人間開発面にまでおよび、その地域間格差、社会階層間格差を論じている。そして、トリックルダウンによって自動的に貧困削減が実現するには時間がかかるとし、従来以上に効率的な貧困削減策が必要であることを主張している。第2章では、インド財政の基礎知識が提示された後に、財政赤字問題が時系列的に論じられる。イ

ンドの財政は2000年代に入って大きく改善したが、リーマンショック時の景気対策により中央・州政府の双方の赤字が拡大したとする分析は納得がいく。第3章では、経済自由化以前の銀行を中心とした金融システムが、自由化後にどのように変化したのか明晰な説明がなされている。そこでは金融政策の変化にともなう商業銀行の台頭や証券市場の再興が主な論点となっている。第4章は、貿易と資本移動の拡大がインド経済に与える影響を、まず両者の長期変動を押さえた後に、前者においては輸出入構造の変化とサービス輸出の拡大に、後者についてはFDIの拡大とインド企業の海外進出に焦点を当てて具体的に論じている。

第5章は長くインド経済の基盤であった農業を取り上げ、それを理解する上での基礎的事項が示された後に、農業技術の普及と農家階層構成の変化、農産物輸入の自由化と農業の課題が提示されている。第6章は、インド産業政策の展開を論じた後に、産業の発展をインド化、グローバル化、インフォーマル化という3つの側面から捉える。第II部全体に通底する観点を提供する重要な章であり、割かれているページ数も他の章より多い。第7章は情報通信産業を扱うが、産業名から一般に想定されるICTサービスよりも、電気通信サービスを主としている点に特徴がある。そこでは携帯電話の普及に着眼し、関連する政策や民営化の動向、プロバイダー間の競争が述べられる。近年、都市農村間でのデジタル・ディバイドが縮小しているという指摘は興味深い。第8章は自動車産業とそのサポーティング産業（その中心は部品産業）の発展を時系列的に論じたものであり、各時代の両産業の状態や関連性が的確に分析されている。第9章の前半では、インドの繊維産業をパキスタンやバングラデシュなどの隣国と比較してその特徴を抽出し、併せて将来展望を行っている。後半は世界的に関心を集めるインド製薬産業に着目し、成長過程とその要因、産業構造およびその転換が分かり易く描かれている。第10章は、財閥・大企業の分析であり、主要財閥の歴史的展開、経済自由化以降の新興財閥・企業の動向が捉えられている。とくに後半では、新しい市場の誕生や拡大に対応して新興財閥の成長がみられることを、具体的な企業の例示により明らかにしている。

第11章は、パキスタン経済の動きを、文民政権下での低成長、軍事政権下での高成長という枠組みで捉える。また農産品を原材料とした繊維・食料品を中心とする産業構造が長く続いており、より付加価値の高い部門への転換が必要であること、そしてマクロ経済の不均衡の改善が課題であることが主張されている。第12章は、スリランカ経済の特徴を、福祉国家とプランテーション経済にあるとみて、その形成過程が把握される。近年は繊維産業の成長が顕著であるが、原材料の輸入依存度が高く他部門との関連が薄いことを問題とする。また、内戦の経済への影響、青年層の失業問題にも言及している。第13章はバングラデシュ経済を多面的に検討し、貧困の削減、輸出品構成の多様化、所得配分の改善を3つの大きな課題とみている。また、同国はNGOの活動が活発であるが、それは「小さくて非効率な政府」問題の裏返しであるとする指摘は鋭い。第14章はネパール経済の構造的問題を、地理的条件、政治的不安定性、技術的後進性、外資投資などの面から浮き彫りとする一方で、将来性のある産業として水力発電と観光を挙げるほか、同国経済における送金や海外援助の重要性を示して

いる。終章では、序章で取り上げた6つの観点について今後の課題を検討している。6つの観点は当然ながら本論各章の内容と深い関係をもつが、ここでは新しい角度から分析がなされている。

以上、各章の内容を要約したが、本書の全体に対して評者なりのコメントを付しておきたい。第1点は、本書は現代インド・南アジア経済の解説を目的としたものではあるが、独立以降の発展過程が重視されており、各章で取り上げる経済事象について時系列的な把握が共通してなされている点を特徴とみる。それは、南アジアは各国とも経済政策（あるいは政治体制自体）の大転換を経験しており、それによって大きく変動した側面がある一方で、貧困や地域格差など構造的に今日まで継続している問題を抱えることが背景にあるものと考ええる。第2点として、取り扱うテーマの幅広さと、紙幅が限られた中での各テーマの的確な掘り下げがなされている点を挙げたい。テキストなどの概説書は、1人ないし2人の少人数の著者が執筆する場合と、各章ごとに著者を変える場合がある。本書は後者を採用しているが、各章の内容は専門家ならでの論点を備えるとともに斬新な知識・視点も提示されており、多人数で執筆する際の長所が十分に発揮されている。第3点は、読者に対する工夫が随所にみられることである。各章の冒頭にはその章の内容をまとめた抄録があって、論の流れとポイントを予め押さえることができる。また、図表類が豊富であり、本文の理解に大いに役立っている。各章の内容にかかわるコラムも設けられており、そこでは最新のインド経済事象の具体が提示されている。そして、巻末には資料として各国の基本統計と1947年以降の年表が付されている。索引もあって、当該用語にかかわる本文での説明ページが明示されており、事典的な使い方もできるようになっている。

そうした反面、本書には地図が1枚（製鉄所の位置とIT-BPO企業の立地を示したもの、158ページ）しかない点が惜まれる。インド・南アジア各国の州や主要都市などを示すインデックスマップは最低限必要であると思われるし、インドは大国であり経済事象の地域差の存在は本書の中でも繰り返し述べられている。そうした動向は地図にすれば一目で理解できる場合も多い。また、諸産業の立地も地図化はそれ程難しいものではないので、テキストという本書の位置づけからも取り組んでほしかった。これは評者が、経済地理学という経済現象の空間的理解を目的とする学問を専門とすることから特に気になるのかもしれないが、要望として記しておきたい。

要望点も記したが、これは本書の価値を損なうものではなく、評者が読んでも知らないことが多く、良い勉強になった。インド・南アジア経済の大学生向けテキストとしては言わずもがな、同地域に関心のある社会人・ビジネスマン、そして研究者にも、必携の書として一読をお薦めする。